

失われたいのちの大切さ

と親分と」という特集記事がトップを飾っています。なにやら男っぽいタイトルとは裏腹に、誌面いっぱい、手足が硬直している脳性まひ児を愛おしそうに抱きかかえる、苦労と愛があふれんばかりの入浴中の親子の写真が掲載されています。何を隠そう、特技は脳性まひの私にとって、その記事が与えたインパクトは相当なものがありました。

その記事によると、私が生まれるほんの10年前の障害者を取り巻く日本の現実、今以上に厳しく、障害児(者)のための施設そのものが少ない上に、重度障害児は、半日でも預かってくれるところはなかったようです。重度脳性まひ児を抱えた親たちが、決死の思いで、国や世間の差別と戦い、なけなしの貯蓄をはたいて私立保育園を立ち上げ、運営しているというルポなのですが、その記事の締めくくりには「国は、こういう子たちを見殺しにしている」と親だけに負担を強いることを、痛烈に批判してありました。

こうした先人たちの決死の闘いと、高齢化社会の恩恵も相まって、どんどんバ

リアフリー化は進み、施設をはじめ、各障害専門の受け入れ先も充実し、障害があっても自分らしく生きられる基盤が整い始めた…と思った矢先に、相模原の障害者施設で起こってしまった殺傷事件。

異常な信条の人による犯行だと片づけてしまえばそれまでですが、振り出しどころか、50年以上も前に後退してしまつたような現実、私は、障害者がどうのこのという以前に、いのちの大切さが失われている警告として受け止めなければならぬ気がしました。

障害者の一人として、容疑者の「障害者は社会のお荷物だから殺した」という動機には、言い知れぬ空虚感に襲われました。が、しかし「そりゃそーやん！もし健常者が社会に役立つ人材というのなら、まともに歩けない、ろれつも回らない、字を書かせても何をさせてもトロクテ下手クソ！ そういう基準からみれば、間違いなく私は社会のお荷物だわ」と思えた瞬間、障害者としての混沌たる

言い知れぬ空虚感

いまこそ 交流を

Ohata 大畑 楽歩 Love

神奈川県相模原市の障害者福祉施設で多数の障害者が殺傷された。脳性まひの障害を抱えながら主婦・母親・アドバイザーとして活躍する大畑楽歩さんが、やむにやまれぬ思いを「大乗」に寄せた。

メガネの人はいろいろ

あなたのまわりに障害者の友人はいなくても、メガネをかけた友人は大勢いらっしゃるでしょ？

メガネの人にだって、善人や悪人、はたまた勤勉な方もいれば、ナマケモノもいらつしやるだろうし、ネガティブな人や陽気な人、いろいろなタイプのメガネの人がいるはずですよ。

そりゃそうです。目が悪くてメガネをかけているだけだから、いろいろな方がいても驚きません！

しかし、「メガネ」の部分を「障害」に

置き換えたとたん、多くの人々は、戸惑い、思考停止状態に陥るのではないでしょうか。

それは小さい頃から、メガネの人は、身近にいらつしやつたでしょうし、それと同時に、いろんなタイプのメガネの人がいることも肌で感じる事ができたはず。けれど障害者となると、ほとんど接したことがない上に、障害の種類も多すぎて、あなたの良心も影を潜めるほど茫然自失ぜんじしつになってしまつてもおかしくはありません。

それに、メガネの人は「目が悪い」というシンプルでわかりやすいサインであり、ましてやメガネをかけている時点で、目が悪いというハンデもクリアしている安心感もあるでしょうから、「メガネ」と「障害」を同じに考えて！ というのは、少々厚かましいかもしれません。

先人たちの決死の闘い

今から約50年前の1968年秋に刊行された『暮しの手帖』に「センチと大将

失われたいのちの大切さ
いまこそ 交流を

呪縛から解放されました。

人間というのは不思議なもので、認めることから希望が広がる。

逃げなきや道は開けるんですね！と
きに開き直りも必要です。

みんな一人じゃ生きられない

そもそも、一人じゃ生きられないのが人間。迷惑をかけずに生きていくなんて、健康な人たちだって、なかなかできる芸当ではないと思うのです。

障害者の私が母になり、わんぱくな息子を育てるとき、「迷惑をかけてもいいから（無意識にかけているんだから）、その代わり、自分の気がついたことやできることは、どんどんやろうね！」を合言葉に、親子共々、地域でのびのび成長し、現在に至ります。

そうして、母が障害者という特殊な環境で育った息子は現在、中学3年生。

お味噌汁のお椀を持って運べないのに、運転をさせたら夫（健常）より上手に車を操り、言語障害があつて不明瞭な

話す言語も違えば文化も違う、最初はコミュニケーションを取るのも一苦労するけれど、交流し続けることで「それほど違わへんやん！おんなじやん！」とお互いを感じた瞬間から、文化（障害に関する知識）や、言語（コミュニケーション方法）の壁なんてちつともバリアではなくなるものです。

守る・守られるの関係でなく

守る・守られるの関係ではなく、もつと互いに好奇心を炸裂させて、素直な気持ちでコミュニケーションしていくだけで良いのです！

そのためには、健常者ももっと遠慮せず、障害者に好奇心のかたまりで接してほしいですし、障害者は、もつと余計なお世話を受け入れるべきだと思います。

そして、健常者のみなさんの好奇心が底をつき、障害を持つ人々も、上手に余計なお世話を受け止められたときに、ようやく障害もメガネと同じ感覚になり、そしていのちの尊さに変わりはないとい

発話なのに、海外では無鉄砲な英会話で、コミュニケーション能力バッチリ！という母を目の当たりにしている息子に「障害者って家族や社会のお荷物かしら？」などと野暮な質問はしない方がよさそうです！

障害者が家から一步も出られなかった50年前と比べて、いまや街中で電動車いすに乗った人や盲導犬を連れている人、白杖をついた人たちは、結構いらっしやいます。たぶん障害者を目にする機会は格段に増えてきていると思います。

ただ、触れ合う機会が少なすぎるため、実際にどうコミュニケーションをしたらいいのかがわからず、健常者の人からすれば、気にはなるけれど、やむを得ず、忙しいふりをしたり、見て見ぬふりをしてしまう。そして障害者は、なんだか卑屈な気持ちになってしまう…。

なんともつたいない。

「障害者」と「健常者」の歩み寄りとは、いわば「異文化交流」。

う当たり前の価値観にたどりつくのではないのでしょうか。

相模原の障害者施設で起きた障害者殺傷事件によってお亡くなりになられた方々に衷心より哀悼の意を表し、負傷された方々に心よりお見舞いを申し上げます。



大畑 楽歩 (おおはた らぶ)
1978年京都生まれ。主婦業の傍ら、講演や執筆、心理カウンセラーや整理収納アドバイザーとしての活動を通じ、障害者の立場からノーマライゼーション社会を提唱している。著書に「三重苦楽—脳性まひで、母で妻」がある。

撮影：田中はるお
オフィシャルサイト ◆ <http://www.ohatarabu.com>